

日本語・マレーシア語におけるヴォイス の比較対照研究——日本語教育の立場から——

加 納 千 恵 子

1. はじめに

近年、東南アジアをはじめとして、英語圏以外の諸地域においても日本語教育がさかんになってきたといわれるが、学習者の母語別の教材や教授法の開発ということになると、まだ十分に行われているとはいえない状態である。今後、ますます諸言語と日本語との比較対照研究の上に立った日本語教材が必要になってくると考えられる。本稿は、マレーシア語（及びインドネシア語）を母語とする学習者に日本語教育を行う際にどのような点が問題になるか、という視点から両言語を比較対照したものである。

マレーシア語というのは、インドネシア語と同様にオーストロネシア（マラヨ・ポリネシア）語族に属する『マライ語』をその母体として発達してきた共通語で、語順も文法構造も日本語とはかなり異なっている。その特徴を簡単に述べると、まず語順は SVO 型で、英語と同じである。(1) 但し、形容詞などの修飾語は(2)のように被修飾語の後に置かれる点は異なっている。

(1) Saya makan ikan. 私は魚を食べる。
(私)(食べる)(魚)

(2) buku bahasa Jepun 日本語の本
(本)(語)(日本)

マレーシア語の文法構造の特徴としては、語の派生のための多様な接辞（接頭辞・接尾辞・接中辞など）の用法が上げられる。例えば、同一語基に接辞をつけて(3)のように異なる品詞を派生することができる。

(3) indah (美しい)	{	— keindahan (美)	} 名詞
		— pengindahan (美化)	
		— pengindah (美しい人)	
		— mengidahkan (飾る) — 動詞	

マレーシア語には日本語の格助詞にあたるものはないが、方向や場所、時などを示す前置詞が存在する。(4)~(6)

(4) Ali pergi ke pasar. アリは市場へ行く。
(アリ)(行く)(へ)(市場)

(5) Mereka bermain di padang. 彼等は野原で遊ぶ。
(彼等)(遊ぶ)(で)(野原)

(6) saya bangun pada pukul enam. 私は6時に起きる。

(私)(起きる)(に)(時)(6)

動詞・形容詞は活用しない。時制は(7)のように時の副詞など文脈によってきまる。⁽¹⁾

否定文は tidak という否定辞を動詞の前においてつくられる。(8)

(7) a. Saya makan ikan kemarin. 私はきのう魚を食べた。

(私)(食べる)(魚)(きのう)

b. Saya makan ikan hari ini. 私はきょう魚を食べる。

(私)(食べる)(魚)(きょう)

(8) a. Saya minum kopi. 私はコーヒーを飲む。

(私)(飲む)(コーヒー)

b. Saya tidak minum kopi. 私はコーヒーを飲まない。

(私)(否定)(飲む)(コーヒー)

さて、本稿では特に日本語において自動詞・他動詞の対応関係や「させ」「られ」などの助動詞によって表出される文法機能が、マレイシア語においては接辞の用法として表われる点に注目して、両言語の『ヴォイス』(『態』)の体系を比較対照していきたい。

2. 『ヴォイス』について

一般に、『ヴォイス』というと、能動態と受動態とが考えられ、両者は現実には同一の事態を話者がどう表現するか、という関心のもち方の違い、とらえ方の違い、として説明される。ある事態を述べる際に普通最も関心もたれるのは「誰がしたか」、「何でそうなったか」という点であり、動作主あるいは原因が一番前にくることが多い。ところが、動作又は作用の影響を被る対象(あるいはその結果)に特に関心が向けられる場合には、それが一番前の位置におかれて、受動態が用いられることになる。

この考え方を拡大していくと、ある事態を単なる動作又は作用としてとらえるか、あるいは動作主のもつ能力や可能性の表出としてとらえるか、というのも「とらえ方の違い」になり、異なるヴォイス(可能態)が用いられる、ということができる。敬語表現などもある事態を話者がどうとらえるかに依っているとえよう。しかし、ヴォイスの範疇の枠をあまり広げすぎると、話者の心的態度(ムード)まで全部入ってしまうことになるので、ここでは次のように定義しておきたい。

金田一(1958)はヴォイスを「動詞の表わす動作、作用に対して、主語がどのような関係に立つかを表わし分ける語形変化⁽²⁾」とし、日本語には能動・受動・使役・可能・敬譲などがあるとした。本稿では、主語と動詞の表わす動作作用との関係を格関係としてとらえそれが動詞に直接つく助動詞(マレイシア語の場合は接辞)の形で表わし分けられるかどうかによって、ヴォイスと認めることにする。

日本語には格助詞が存在するので、それらをとる名詞句が動詞とどのような格関係に立つか、と助動詞の形を目じるしにすると、「書く⁽³⁾」という動詞には次のようなヴォイスが認められる。

(9) 太郎が 字ヲ 書イタ。

能動態

〈動作主〉〈対象〉

- (10) 先生ガ 太郎ニ 字ヲ 書カセタ。 使役態
 〈使役主〉 〈動作主〉 〈対象〉
- (11) 字ガ (太郎ニヨッテ) 書カレタ。 受動態
 〈対象〉 〈動作主〉
- (12) 私ガ 太郎ニ 字ヲ 書カレタ。 被害態
 〈被害者〉 〈動作主〉 〈対象〉
- (13) 太郎ニ 字ガ 書ケタ。 可能態
 〈能力者〉 〈対象〉
- (14) 字ガ 書ケタ。 自発態
 〈自発対象〉

(11)の受動態と(12)の被害態を別のヴォイスとしたのは、格助詞「ガ」を取る名詞句が「書イタ」という動作に対してどういう格関係に立つかの違いによるものである。(14)の自発態というのは「キレイニ字ガ書ケタ」のように、動作主の意志や努力とは必ずしも関わりなく自然の結果としてそうなる意を示すヴォイスで、「誰ニ」という名詞句と共に起できない点と「～テイル」という形で使える、すなわち動作性である点で、状態性の可能態と異なっている。

マレイシア語には格助詞のようなものはないが、語順や前置詞、そして意味等から主語に立つ名詞句の格概念を設定し、動詞につく接辞によって表わし分けられる文法機能を考えると、次のようなヴォイスが認められる。

- (15) Ali meN-tulis huruf itu. アリがその字を書く。 能動態
 (アリ)(接辞)(書く)(字)(その)
 〈動作主〉 〈対象〉
- (16) Huruf itu di-tulis (oleh Ali). その字が(アリによって)書かれる。 受動態
 (字)(その)(接辞)(書く)(によって)(アリ)
 〈対象〉 〈動作主〉
- (17) Ali ter-tulis huruf itu. アリが{うっかり}その字を書く。 無意志態
 (アリ)(接辞)(書く)(字)(その){誤まって}
 〈無意志動作主〉 〈対象〉
- (18) Huruf itu ter-tulis (oleh Ali). その字が(アリによって){うっかり}書かれる。 無意志受動態
 (字)(その)(接辞)(書く)(によって)(アリ){誤まって}
 〈対象〉 〈無意志動作主〉
- (19) Ali tidak ter-tulis huruf itu. アリはその字が書けない。 可能態
 (アリ)(否定辞)(接辞)(書く)(字)(その)
 〈能力者〉 〈対象〉
- (20) Huruf itu tidak ter-tulis (oleh Ali). その字はアリには書
 (字)(その)(否定辞)(接辞)(書く)(によって)(アリ)けない
 〈対象〉 〈能力者〉 可能受動態

受動態(16)は能動態(15)の対象格の名詞句が主語となり、動作主が前置詞 oleh をともなって動詞のうしろに移動したものである。他動詞の能動態には接辞 meN-⁽⁴⁾、受動態には di- がつけられる。接辞 ter- は(17)(18)と(19)(20)に見られるように能動態に

も受動態にも用いられ、しかも表わす意味から無意志態と可能態とに分けられる。(17) 文の Ali は tulis (書く) という動作はするが、それを意図してするのではない。日本語でその意味を表わすには「うっかり」とか「誤まって」とかいう語を補わなければならない。(17) の Ali のようなものを〈無意志動作主格〉とし、(16) とは別のヴォイスと考えることができる。(18) の無意志受動態で、動作主格があらわれない時、その表す意味は日本語の自発態に近いように思われる。他方、接辞 ter- は (19) (20) のように否定辞 tidak を伴うと可能的意味を表わす。

さて、以上のような両言語におけるヴォイスの体系をいわゆる自動詞・他動詞の対応関係を中心に比較対照していくため、本稿ではそれと関わり の う す い ヴォイス (敬讓態など) は除外して論をすすめることをお断わりしておく。

3. 自動詞・他動詞の対応

日本語の動詞には「あく」と「あける」、「しまる」と「しめる」のように音韻形態的に対をなしている自動詞と他動詞が数多く存在する。このような自・他動詞文においては、他動詞文で「ヲ」とってあらわれる名詞句が自動詞文では「ガ」とってあらわれる、という対応が見られる。

- (21) a. 戸ガ アク。 自動詞文
b. 太郎ガ 戸ヲ アケル。 他動詞文

	自 動 辞	他 動 辞	動 詞 例
(1)	— e — i	— as — os	出ル・出ス, 枯レル・枯ラス, 生キル・生カス, 伸ビル・伸バス, 起キル・起コス, 落ちル・落トス, etc.
(2)	∅	— e	開ク・開ケル, 建ツ・建テル, etc.
(3)	— re — r	— s — se	離レル・離ス, コワレル・コワス, 直ル・直ス, 通ル・通ス, 乗ル・乗セル, etc.
(4)	— ar	∅ — e	フサガル・フサグ, ツナガル・ツナグ, 止マル・止メル, シマル・シメル, etc.
(5)	不規則及び同形		ハイル・イレル, キエル・ケス, etc. ヒラク, トジル, 増ス, etc.

(21) を「戸が閉っている状態から開いている状態への変化」という同一の事態としてとらえ、(21 a) は「戸」という対象に起きた変化に関心をもった見方、(21 b) は誰がそのような変化をひき起したか、という動作主に関心をもった見方、とすれば、ヴォイスの問題になってくる。そのような抽象的な状態変化を表わす動詞の語根として AK- という形を設定すると、自動詞「あく」は語根に自動辞のがついたもの、他動詞「あける」は他動辞 -e がついたものと考えることができ、両構文の間の格の対応関係はヴォイスの違いとして説明されることになる。対応する自動辞と他動辞は前ページの表のように分類される。⁽⁵⁾

一方、マレイシア語にも、動詞の語根に接辞をつけて自・他動詞を派生するものが数多く存在する。

- (22) a. Ali masuk ke dalam bilik. アリがへやに入る。
(アリ)(入る)(へ)(中)(へや)
b. Saya meN-masuk-kan Ali ke dalam bilik. 私がアリをへやに
(私)(接辞)(入る)(接辞)(アリ)(へ)(中)(へや) 入れる。
- (23) a. Dia tidur di atas katil. 彼がベッドにねる。
(彼)(ねる)(に)(上)(ベッド)
b. Saya meN-tidur-kan dia di atas katil. 私が彼をベッドにねか
(私)(接辞)(ねる)(接辞)(彼)(に)(上)(ベッド) せる。
- (24) a. Kereta itu ber-henti. 車が止まる。
(車)(その)(接辞)(止まる)
b. Dia meN-henti-kan kereta itu. 彼が車を止める。
(彼)(接辞)(止まる)(接辞)(車)(その)
- (25) a. Rambut-nya meN-panjang. 彼女の髪がのびる。
(髪)(彼女の)(接辞)(長い)
b. Dia meN-pajang-kan rambut-nya. 彼女が髪をのばす
(彼女)(接辞)(長い)(接)(髪)(彼女の)

マレイシア語における接辞の対応は次のようにまとめられる。

	自動詞接辞	他動詞接辞	語根例
(1)	Ø	meN- -kan	tidur, bangun, masuk, etc. (ねる)(おきる)(入る)
(2)	ber-		henti, jalan, renang, etc. (止まる)(歩く)(泳ぐ)
(3)	meN-		panjang, kotor, etc. 形容詞 (長い)(汚い)

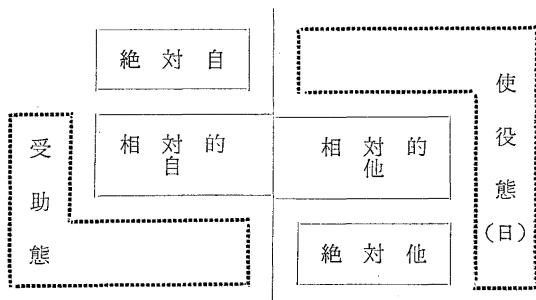
このように、日本語とマレイシア語には自他の対応のある動詞群が存在するが、これらを「相対的自動詞・他動詞」と呼ぶことにし、そこに見られる格関係によって次のページの表のように4つに分類した。⁽⁶⁾

もちろん、日本語では相対的自・他動詞であっても、マレイシア語ではそうではない場合もあるし、又逆もあり得る。例えば、「アク」・「アケル」に相当するマレイシア語は他動詞 meN-buka (あける) しかない。(このように他動詞だけで、対応する自動詞をも

	類	格 関 係	日 本 語 例	マ レ イ シ ア 語 例
相 対 的 自 ・ 他 動 詞	I	〈A〉 Vi 〈A〉 〈O〉 Vt	{ 入ル { 帰ル etc. 入レル { 帰ス	{ masuk (入る) etc. maN-masuk-kan (入れる)
		〈E〉 Vi { 〈A〉 } 〈E〉 Vt { 〈C〉 }	{ 苦シム 苦シメル	{ bimbang (心配する) etc. meN-bimbang-kan (心配させる)
	III	〈O〉 Vi { 〈A〉 } 〈O〉 Vt { 〈C〉 }	{ 止マル { アク etc. 止メル { アケル	{ ber-herti (止まる) etc. meN-henti-kan (止める)
	IV (7)	〈O〉 Vi 〈Ac〉 〈O〉 Vt	{ 落チル { ナクナル etc. 落トス { ナクス	

たないものを「絶対他動詞」、反対に自動詞しかないものを「絶対自動詞」と呼ぶ)そこで、動作の対象に関心がある時には受動態の *di-buka* という形を用いて、これが日本語の自動詞「アク」に相当する働きをするのである。逆に、マレイシア語では *ber-renang* (泳ぐ)・*meN-renag-kan* (泳がせる)は相対的自・他動詞になるが、日本語の「泳グ」は絶対自動詞である。従って、使役態「泳ガセル」が対応する他動詞の代わりに機能を果たすと考えられる。

以上のようなことを簡単に図で表わすと下のようなになる。日本語の場合、絶対自動詞に関して使役態が他動詞の機能(動作主又は原因志向)を果たしている。又、両言語において、絶対他動詞の受動態が自動詞の機能(対象又は結果志向)を果たしていると言えよう。



4. 使役態の機能

日本語において、絶対自動詞は対応する他動詞をもたないので、その動作・作用の原因(又は使役主)に言及する場合には(26b)(27b)のような使役文が使われる。

- (26) a. 子供が 歩く。
b. 母親が 子供ヲ 歩カセル。
(27) a. 太郎が 泳グ。
b. 先生が 太郎ヲ 泳ガセル。

マレーシア語の接辞 meN-kan の(28b)(29b)の用法は、一見日本語の使役の助動詞「(サ)セ」に相当するかに見える。

- (28) a. Budak itu ber-jalan. 子供が 歩く。
(子供)(その)(接辞)(歩く)
b. Ibu meN-jalan-kan budak itu. 母親が子供を歩かせる。
(母親)(接辞)(歩く)(接辞)(子供)(その)
(29) a. Taro ber-renang. 太郎が泳ぐ。
(太郎)(接辞)(泳ぐ)
b. Guru itu meN-renang-kan Taro. 先生が太郎を泳がせる。
(先生)(その)(接辞)(泳ぐ)(接辞)(太郎)

しかし、接辞 meN-kan は他動詞につけて使役の意味を表わすことができない。(30b)(31b)はむしろ三項他動詞の意味になるのである。

- (30) a. Ali meN-tulis surat. アリが手紙を書く。
(アリ)(接辞)(書く)(手紙)
b. Saya meN-tulis-kan Ali surat. 私がアリに手紙を書く。
(私)(接辞)(書く)(接辞)(アリ)(手紙) (*私がアリに手紙を書かせる)
(31) a. Dia meN-beli baju. 彼が洋服を買う。
(彼)(接辞)(買う)(洋服)
b. Saya meN-beli-kan dia baju. 私が彼に洋服を買ってやる。(*私が彼に洋服を買わせる)

従って、マレーシア語においては、使役態を表わす接辞は存在せず、meN-jalan-kan(歩かせる)や meN-rehat-kan(休ませる)のような動詞は相対的他動詞である、と考えた方が都合がよい。

さて、日本語の使役態を表わす助動詞「サセ」にはその意味から大きく次の4つの機能があると考えられる。

- (i) 使令使役: <DA> <G> [s] サセ

使令使役主が動作主にある内容の使令を下し、動作主はその使令に従って動作する意を表わす。

例) 先生が 生徒ヲ 立タセル。 母親が 太郎ニ 宿題ヲ ヤラセル。

- (ii) 許容使役: <PA> <G> [s] サセ

許容使役主が動作主に自分の意志である動作を行うことに関して許可を与える意を表わす。⁽⁹⁾

例) 彼ガ 弟ヲ 大学ニ 行カセル。社長ガ 秘書ニ 休ミヲ 取ラセル。

(iii) 原因使役: <C> [s] サセ

ある原因で ある事態が ひきおこされるという意を表わす。

例) 大地震が 住民ヲ 狂気ニ 走ラセタ。 失恋の痛手ガ 彼女ニ ソンナ行
動ヲトラセタ。

(iv) 無意志使役: <Ac> [s] サセ

使役主にはそうする意志はないが、その事態の責任は使役主にあるという意。

例) 彼女が 子供ヲ 死ナセタ。 太郎ガ 足ヲ スベラセタ。

但し、(iv) の無意志使役では、使われる動詞が絶対自動詞の IV 類に限られているため、これは使役態本来の機能ではなく、対応する他動詞が欠けている穴を埋めるための転用と考えられる。そして、前節で述べた、他動詞の機能を果す使役態というのは、(1) の使令使役が絶対自動詞に使われる場合のことである。

ところで、マレイシア語で日本語の使役のような意味を表わそうとすると、meN-suruh (命令する), meN-benar-kan (許す), meN-sebab-kan. (ひき起こす) などの動詞を使った (32) のような構文になる。

- (32) a. Guru meN-suruh murid itu ber-diri. 先生が生徒を立たせる。
(先生) (接辞)(命令する)(生徒) (その)(接辞)(立つ)
b. Guru meN-benar-kan murid itu duduk. 先生が生徒に坐らせる。
(先生) (接辞)(許す)(生徒)(その)(坐る)
c. Gempabumi itu meN-sebab-kan 地震が住民を走らせた。
(地震) (その)(接辞)(ひき起こす)
penduduk-penduduk ber-lari.
(住民, pl.) (接辞)(走る)

マレイシア語には日本語の使役の (iv) にあたるような意味を表わす補助動詞や接辞がないため、「子供ヲ死ナセタ」ような文はマレイシア語を母語とする学習者には難しいのである。

5. 受動態・可能態・自発態と無意志態

マレイシア語において、meN-buka (あける) のような絶対他動詞が接辞 di-を伴って受動態になると、自動詞に相当する機能を果すことはすでに述べた。

- (33) a. Orang itu meN-buka pintu. 人が戸をあけた。
(人) (その)(接辞)(あける) (戸)
b. Pintu di-buka oleh orang itu. 戸が人によってあけられた。
(戸) (接辞)(あける)(によって)(人)(その)
c. Pintu di-buka. 戸が{あけられた。
(戸)(接辞)(あける) {あいた。

日本語においても、絶対他動詞を自動詞的に(対象に関心をもつて)使おうとすると、受身の助動詞「(ラ)レ」があらわれる。例えば、動作が完了した状態を表わす「他動詞テアル」構文に対応するものとして、自動詞には「～テイル」構文が (34b) (35b) の

ように使われる。しかし、対応する自動詞がない場合には (36 b) (37 b) のように受動態がその役目を果すのである。

- (34) a. 戸ガ 開ケテアル。
 b. 戸ガ 開イテイル。
 (35) a. カーテング 掛ケテアル。
 b. カーテング 掛カッテイル。
 (36) a. 花ビンガ 置イテアル。
 b. 花ビンガ 置カレテイル。
 (37) a. 詩ガ 書イテアル。
 b. 詩ガ 書カレテイル。

但し、日本語の助動詞「(ラ)レ」は上記のような純粋な受動態のほかに「被害態」というべき機能果しており、これはマレイシア語の接辞 di- にはないものである。マレイシア語には接辞 ke- -an を使った (38 a) (39 a) のような文があるが、この接辞の用法はもともと好ましくない事態や動作を表わす動詞にしかつかないという点で日本語の「(ラ)レ」ほどの一般性がなく、ヴォイスとして認められるほど用例も多くない。

- (38) a. Saya ke-curi-an wang. 私はお金を盗まれた
 (私)(接)(盗む)(接)(お金)
 b. Δ meN-curi wang saya. 誰かが私のお金を盗んだ。
 (接)(盗む)(お金)(私)
 (39) a. Ali ke-colek-an anak-nya. アリは子供をさらわれた。
 (アリ)(接)(さらう)(接)(子供)(彼の)
 b. Δ meN-colek anak Ali. (誰かが) アリの子供をさらった。
 (接)(さらう)(子供)(アリ)

また、「誰タニ (～サレタ)」という動作主格が表面に表わせないのも、日本語の被害態と違っている点である。さらに、マレイシア語の ke- -an は人間以外のものから被害を被ったときにも (40 a) のように使えるが、日本語では「(ラ)レ」を使うと非文になる。

- (40) a. Dia ke-hilang-an buku. 彼は本をなくした。
 (彼)(接)(なくなる)(接)(本) (*彼は本になくなられた。)
 b. Buku-nya hilang. 彼の本がなくなった。
 (本)(彼の)(なくなる)

マレイシア語においては無意志の動作を表わす ter-⁽⁴¹⁾ 可能の意味を表わす ter-⁽⁴²⁾ が能動態にも受動態にも使えるというのが一つの特徴である。

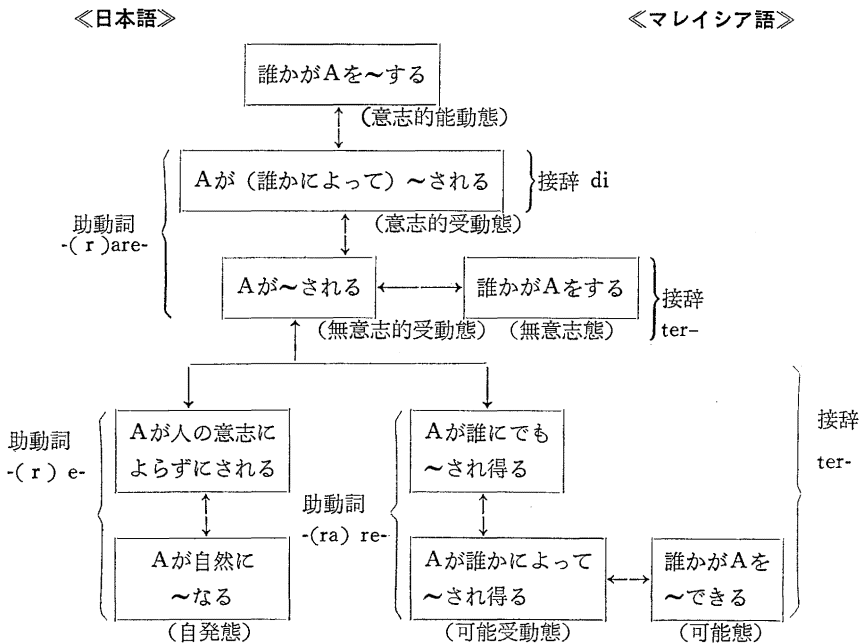
- (41) a. Dia ter-buka pintu itu. 彼が戸をあける。
 (彼)(接)(あける)(戸)(その) (あける意志がない)
 b. Pintu itu ter-buka (oleh dia). 戸が{あけられる
 (戸)(その)(接)(あける)(によって)(彼) {あく
 (42) a. Dia tidak ter-buka pintu itu. 彼は戸があげられない。
 (彼)(否定)(接)(あける)(戸)(その)
 b. Pintu itu tidak ter-buka (oleh dia). 戸が{あげられない。
 (戸)(その)(否定)(接)(あける) {あかない。

そして、(41 b) (42 b) のような受身文が、日本語に訳すと自動詞「開ク」に相当することが分かる。すなわち、日本語の相対的自動詞には無意志受身 (= 自発) や可能の意味が

含まれている、ということであろう。例えば、自動詞「止マル」というのは「(誰かによって) 止められる」という受身の意味と、「(自らの力で自然に) 止まる」という自発の意味と、「止まる、あるいは止めることができる」という可能性の意味とを合わせもつているといえよう。特に否定の「止マラナイ」になると可能の意味が強くなるがこれはマレイシア語の *ter-* が否定辞 *tidak* と共起した時に可能態を表わすことと符合する。

日本語においては、助動詞「(ら)レ」が受身にも可能にも自発にも使われる。この受身—可能—自発の意味の連続性が、このような文法的機能語の同一性(日本語の「(ら)レ」とマレイシア語の *ter-*) として両言語に見られることは、実に興味深い。

両言語におけるこれらのヴォイス間の関連性とそれぞれの言語での文法的機能語の分担を簡単に図示すると次のようになる。



6. 両言語におけるヴォイスの体系

本稿では、両言語のヴォイスを自動詞と他動詞の対応関係を中軸においた体系として考えてみた。相対的自・他動詞においては、動作・作用の原因(又は動作主)に関心をもったとらえ方をすれば他動詞が使われ、逆に対象となるもの(又はその結果)に関心をもてば自動詞が使われる、ということができる。

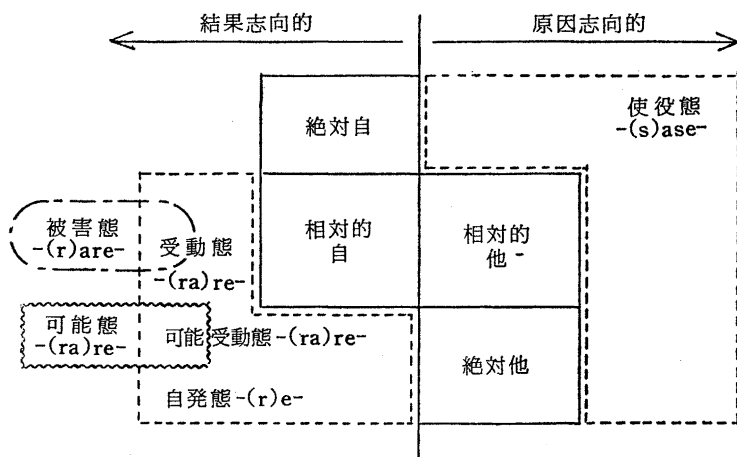
ただ、絶対自動詞のように対応する他動詞を欠いているものに関しては、日本語では使役態がその穴を埋めている。マレイシア語には、日本語の使役態に当たるものは存在しない。但し、日本語では絶対自動詞であっても、マレイシア語では *meN-* *-kan* をつけて他

動詞として使えるものも多い。

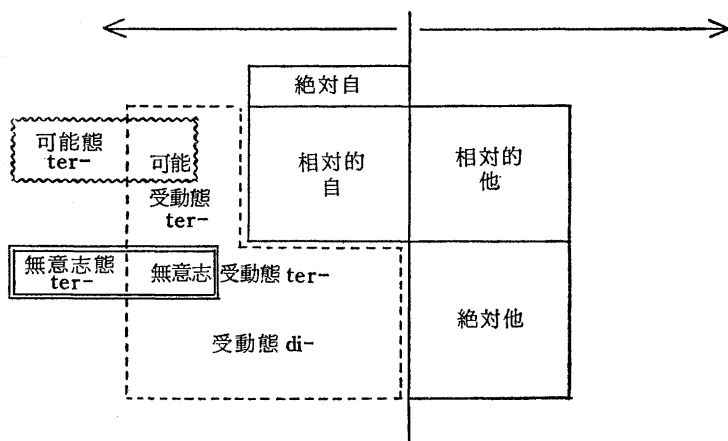
また、絶対他動詞のように対応する自動詞を欠いているものに関しては、両言語において、受動態がその代用をしている。但し、日本語では相対的自他動詞であるものが、マレーシア語では他動詞しかない、といった例が少なくない。さらに、日本語の相対的自動詞はそれ自身の中に可能や自発の意味を含んでいることが多いので、可能受動態や自発態も自動詞の機能を代用している部分がある。マレーシア語には自発態というのはないが、無意志受動態の動作主があらわれない文は日本語の自発に近いのではないと思われる。

ここで、両言語のヴォイスの体系を比較対照した結果をわかりやすく図で示してみると、次のようになる。

日本語動詞のヴォイス



マレーシア語動詞のヴォイス



7. おわりに

さて、最後に両言語のヴォイスの種類を簡単にまとめておくと、次のような表になる。

	被害態	自発態	無意志態	可能態	受動態	使役態
日本語	○	○	×	○	○	○
マレーシア語	×	×	○	○	○	×

上の表から想像できることは、マレーシア語を母語とする学生にとっては、自国語にはなくて日本語にあるヴォイスが難しいだろうということである。すなわち、被害態・自発態・使役態である。但し、自発態は使用範囲が限られているヴォイスでもあり、意味はマレーシア語の無意志受動態を使って説明することもできるため、大した問題にはならないようだ。問題は被害態の「(ら)れ」の用法と使役態の「(さ)せ」の用法である。似た意味を表わす表現形式（前者には ke- -an 構文、後者には補助動詞を使った構文）はあっても、カバーする意味領域のずれや、使える範囲のずれなどがあるので難しいわけである。しかし、対照研究の成果を生かし、両言語の共通点と相違点に気づかせることは、学習者への大きな手助けとなるだろう。

ここで対照研究の難しさについて述べておきたい。二つの言語を比較対照するためにはまず両者を記述するための同じ文法の枠組みが必要であるが、日本語のようにある程度文法研究が進んでいる言語と違って、マレーシア語に関しては新しい言語理論による説明記述がその国においてさえまだ十分行われていない段階である。このような状況では、研究のベースになる文法理論を見つけることがまず難しいと言わなければならない。本稿では、格文法の枠組みと意味の面から両言語の比較対照を試みたが、マレーシア語の文法記述はまだ不完全である。もちろん、研究者の語学力の問題もあろう。しかし、どうしても比重が研究者の母語の方に傾いてしまうのは避けられなかった。そして、また日本において、適格なインフォーマントを数多く見つけることも、難しいことの一つであろう。

なお、本稿は筆者が1982年3月に筑波大学に提出した修士論文 A CONTRASTIVE STUDY OF “VOICE” SYSTEM IN JAPANESE AND BAHASA MALAYSIA を多少修正し、要約したものである。ヴォイスに関する両言語の詳しい記述、具体例などについては、上記の修士論文を参照されたい。

最後に、ヴォイスの問題を果して格の概念だけで説明できるのか、という別の問題も残されているが、それは今後の課題としたい。

註

- 1) 動詞のアスペクトを表わす助動詞としては sudah, telah (完了相) や sedang (進行相) などがある。
- 2) ここでは、話者が最も関心をもって一番前に提示する名詞句を「主語」と呼ぶことにする。し

かし、主語以外の補語（動詞が必要とする名詞句）との格関係もヴォイスを考える際には考慮に入れるものとする。

- 3) 名詞句が動詞の表わす動作、作用に対してどのような格関係に立つか、を表わす概念として、主にフィルモア（1971）によって提唱された格概念を若干修正して、次のように定めた。

〈動作主格〉(Agent)：意志をもって動作を行う者

〈対象格〉(Object)：動作の対象（又は結果）となる物（者）

〈経験者格〉(Experiencer)：ある心理的状态を経験する者

〈無意志動作主格〉(Actor)：意志をもたずにある動作を行う者 (Non-volitive Agent)

〈原因格〉(Cause)：ある動作・作用の直接的原因となる事柄

〈起点格〉(Source)：物（者）が移動する際の出発点、変化する前のものとの状態。言語行為や感情などがある対象に向けられる際の源となる者 (Agentive Source)

〈目標格〉(Goal)：物（者）が移動する際の到着点、変化が起ったあとの状態。言語行為や感情などが向けられる対象 (Agentive Goal)

そのほか、ヴォイスに関係のあるものとして次のように格概念と設定する。

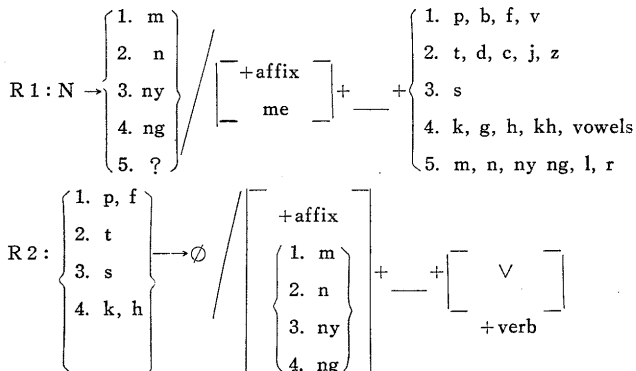
〈被害者格〉(Sufferer)：ある動作作用によって不利益、迷惑などを被る者。「～テモラウ」構文の主語になる〈受益者格〉(Benefactive) と対をなす概念で、2つをまとめて〈目標者格〉(Agentive Goal) とすることもできる。

〈使役主格〉(Causative Agent)：使役文は構文的には三項他動詞文と同じ形になるので、主語は〈起点者格〉(Agentive Source) と考えることもできる。日本語の使役構文では意味によって〈許容主格〉(Permissive Agent) と〈使令主格〉(Directive Agent) とが考えられる、

〈能力者格〉(Competent person)：ある動作を行う能力・状況の可能性をもっている者

〈自発対象格〉(Spontaneous Object)：自発的に変化・作用を起こす物

- 4) マレイシア語の接辞 meN- は音韻規則により次のように変化する。



- 5) 対応する自：他動詞のうち、 \emptyset ・-as の対応があるものは、使役の助動詞「(さ)せ」の短縮形と見なす。例) 咲く・咲かす、飛ぶ・飛ばす, etc. また、-e・ \emptyset の対応があるものは自発態と見なす。例) 煮える・煮る、書ける・書く, etc.

- 6) 加納（1982）では、自発対象格が自動詞文の主語に立つ類（例、育つ・育てる、溶ける・溶かす, etc.）をⅢ類とし、以下Ⅳ類、Ⅴ類と5つに分類したが、本稿では4つにまとめた。

- 7) Ⅳ類の他動詞文においては、大抵の場合、対象格に立つものは無意志動作主格に立つものの所

有物であることが多い。例) 太郎が サイフヲ 落トス。
(=太郎のサイフ)

- 8) そのほかに、日本語では「死ヌ」と「殺ス」は別の語彙と考えられるが、マレイシア語では mati (死ぬ)・meN-mati-kan (死なせる、殺す) のように相対的自・他動詞になる、といった場合もある。
- 9) 「言イタイヤツニハ、言ワセテオケ。」や「肉ヲ切ラセテ、骨ヲ断ツ。」のような、いわば「放任」といった意味の使役文もここに含める。
- 10) p. 16 で相対的自・他動詞を4つに分類したように、絶対自動詞もその格関係によってI類からIV類に分けられる。

〈主な参考文献〉

- Abdullah Hassan, (1974), The Morphology of Malay. Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur.
- Fillmore, C. (1971), "Some Problems for Case Grammar," in Report of the 22nd Annual Round Table, (1971), Georgetown univ., pp. 35—56
- 井上和子, (1976), 『変形文法と日本語』, 大修館
- 金田一春彦 (1958), 『日本文法講座1』, 明治書院
- 奥津敬一郎 (1967), 「自動化・他動化および両極化転形」, 『国語学70号』 pp. 46—66.
- 寺村秀夫 (1975), 『An Introduction to the Structure of Japanese-work book 3』三友社